

手順3 AED を用いた電気ショック

AEDとは「自動体外式除細動器」のことで、心室細動と呼ばれる不整脈（心臓のけいれん）によってポンプとして動かなくなってしまう心臓に電気ショックを与えることにより、元の収縮を取り戻させるための機器です。AEDは心電図を自動的に解析し、音声や表示をしてくれます。落ち着いてAEDの指示に従い救命処置を進めてください。具体的な操作方法は下記をご覧ください。

1 電源を入れると音声の指示が始まります。 音声の指示に従って行動してください。

2 電極パッドを貼ります。位置はパッドなどにも描いてあるので、それに従います。

胸が汗などでぬれている場合は拭き取ってから貼ります。シップ薬など何か貼られていたら剥がします。ペースメーカーなど皮膚の下に何か埋め込まれている場合はそこを避けて貼ります。就学前の子どもには、子ども用パッドを使用するか、小児モードに切り替えます。子供用パッドが無い場合は、大人と同じパッドを使います。



3 AEDが自動的に心電図を解析し、音声などで指示を出します。

電気ショックが必要な場合は「電気ショックが必要です」と音声流れ、充電が始まります。

充電が終わり、「ショックボタンを押してください」の音声や充電終了の連続音流れ、ショックボタンが点滅します。

「離れて」とまわりの人に注意し、誰も触れていないことを確認し、ショックボタンを押します。



公益財団法人日本心臓財団ホームページ「AEDを使った救命の仕方」、キャラクターデザイン（モンキャラメル）から引用

9月9日は「救急の日」

目の前で突然人が倒れたときの応急手当の方法

～あなたの勇気と行動が大切な命を救います～

■問い合わせ：危機管理課危機管理政策グループ ☎内線 352



必要なのは3つ!

① 119番通報とAEDの要請

② 胸骨圧迫（心臓マッサージ）

③ 電気ショック（AED）

手順1 反応の確認と119番通報／AEDの要請

周りの安全を確認して近づき、肩をたたきながら「大丈夫ですか?」と声をかけます。反応（動きや返事）がなければ、大きな声で人を呼び、119番通報とAEDを持ってくるように頼みます。



! 救急車を待っていては遅すぎます!

心停止の際の応急処置は「秒」を争います。一刻も早く救命処置を始めないと、助かる可能性がどんどん低下していきます。

手順2 呼吸の確認と胸骨圧迫（心臓マッサージ）

倒れた人をあおむけにして、10秒以内に胸やおなかの動きを見ます。呼吸がないか普段どおり息をしていない時は、胸骨圧迫（心臓マッサージ）を行います。

※なお、息をしているように見えても、突然、心停止となった場合、「死戦期呼吸」と呼ばれるゆっくりとあえぐような呼吸や「けいれん」が認められることがあります

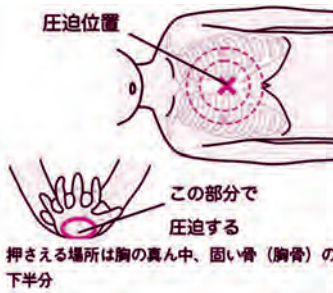
ポイントは「強く」「早く」「絶え間なく」

- 強く：胸が約5cm沈むまでしっかり体重をかけて押し下げ、すぐに緩めます
- 早く：1分間に100～120回のテンポで
- 絶え間なく：倒れた人が動き出すか、救急車が来るか、AEDが届くまでしっかり続けます

! 行動を起こすことを恐れない

仮に心停止でなかったとしても、胸骨圧迫によって状態が悪化することはありません（倒れている人が嫌がるそぶりを見せたら中止します）。

AEDには診断機能がついていて、必要のないときに電気ショックを与えてしまうこともありません。倒れた人に反応がなかったら、恐れずに行動を開始してください。



「秋雨と台風の季節」

9月に入ると、日本付近の夏の天候を支配していた太平洋高気圧は、少しずつ東の海上へと後退していきます。代わって大陸からの新鮮な空気を運んでくる移動性高気圧や低気圧が通るようになります。

日々の天気の変化では、残暑の厳しい日があるかと思えば、秋本番の涼しさを感じる日も現れるようになります。1年の季節の変化の中で夏の前に梅雨があったように、夏の後には秋雨という雨の季節があります。これからは秋雨前線や台風による大雨災害への備えが必要な季節です。

梅雨の時期と秋雨の時期の雨の降り方を比べてみると、西日本と東日本では大きな違いがあります。西日本の方では、秋雨の時期よりも梅雨の時期にたくさんの雨が降ります。ところが東日本では、これとは逆に梅雨の時期よりも秋雨の時期にたくさんの雨が降ります。これからの季節は雨にも注意が必要です。

例えば、西日本の福岡では、秋雨の時期（9～10月）には梅雨の時期（6～7月）の半分程度の降水量しかありませんが、龍ヶ崎市の秋雨の時期（9～10月）の降水量は、梅雨の時期（6～7月）の1.4倍にあたる370ミリもあります。このように東日本で秋に降水量が多くなる訳は、停滞する秋雨前線と接近してくる台風によるものです。

日本への台風の襲来が多い時期は、主として7～10月です。特に9月は、昔から「二百十日」や「二百二十日」などとして恐れられているように、台風に対する警戒が必要な月です。

実際に過去の資料を見ると、カスリーン台風や洞爺丸台風・狩野川台風・伊勢湾台風など、顕著な災害をもたらした台風は確かに、9月に多く襲来しています。「二百十日」は暦の上で、立春から数えて二百十日目ということで、9月1日にあたります。

このように見てくると、「二百十日」が台風の襲来しやすい日とされているのは、9月1日だけに限らず、「9月に入ると、これからは台風災害への備えが特に必要です」と、台風についての警戒を呼び掛けているのかもしれない。

【龍ヶ崎市気象防災アドバイザー・酒井重典】